

「教職専門としての総合的学習・探究の時間の指導法」の課題と可能性を求めて
—静岡県立大学での実践をモデルに—

1. 始まりは72歳の新人非常勤講師として

私は2023年度後期に、静岡県立大学（以下県大と略す）食品栄養科学部の非常勤講師として教職専門科目を担当した。科目名は栄養生命科学科の「総合学習の時間」と食品栄養科学科、環境生命科学科共通の「総合的な学習の時間の指導法」の二種に分かれていた。前者が栄養教諭、後者が高校理科と取得免許が異なることが理由だが、免許種の区別なく必修化された教職専門科目「総合的学習の時間の指導法」（以下総合指導法と略す）と位置付けての講義と判断した¹⁾。

受講生は3学年10名。学科単位に3チーム（4人、4人、2人）に分かれ、15時間2単位の講義と活動によって作成したパワーポイント（以下PPTと略す）をチーム名、調査探究テーマ、スライド枚数、専攻・男女別人数、取得免許状の順に紹介しよう。

☆チームりんちゃん「食育と防災」スライド165枚：栄養生命科学科（女性4名 栄養教諭）
☆チームまいまい「AIと人間の在り方」スライド106枚：食品生命科学科（女性3名 男性1名）
☆チームcoffee「男女ともに幸せに生きる～身近になった社会の問題や取り組みについて考える～」スライド120枚：環境生命科学科（女性2名） ☆食品生命科学と環境生命科学は高校理科☆

時代と社会が求める現代的課題に直結するテーマの魅力、枚数が示唆する内容の豊富さを紹介する前段として、ユニークな名称のチームによる個性的な作品誕生の背景を述べておきたい。

実は県大食品栄養科学部に依頼されての講義は、静岡大学（以下静大）退職後7年、72歳の新人講師として、コロナ最盛期の2021年度夏休み期間開講の集中講義4日間がスタート。しかもコロナ禍の集中web講義のためか、食品栄養科学部13名に加えて、国際関係学部8名、経営情報学部5名、大学院2名への国語、英語、情報、数学の免許取得者も含めた講義委託であった。体面での活動を重視する総合指導法を集中webでの条件には違和感があったが、静大での教職専門の教科教育法（小中社会・高校公民、生活科・総合）と教科専門（現代社会論・社会学演習）の講義担当35年間の蓄積から選んだ教材と方法を準備してzoomを立ち上げた。

開始直後はzoom画面を分割して並ぶ学生の畏まった姿に新鮮さを楽しむ余裕があったが、一人ひとりの表情がみえてくるに伴い、教員養成学部とは異なる空気感（学生の反応）に気づいた。その瞬間から35年の経験を棄てる紆余曲折、毀誉褒貶、試行錯誤への転換が始まった。

最初に試みたのはZOOM機能を活かし、私個人の研究調査全国ネットワークから選んだゲストティーチャーへの講義依頼であった。さらに同時進行により、zoom操作（画面共有、ブレイクアウトルームなど）に四苦八苦の私と異なり、PCとweb操作に長けた学生による臨機応変の対応が可能な技術提供者ネット（無力な講師と有能な学生との信頼関係）が形成された。

その延長線上で学生の専門領域が小中高の「総合的な学習の時間」（以下総合と略す）における探究（的）活動のテーマとして、学習指導要領に明記される現代的課題と重なることに気づいた。それは受講学生の誰もが教える側に、講師の私が学ぶ側に変身することで、グループ単位の調査と探究の活動が大きく進むことを知ることにつながった²⁾。

翌年（2022年）はコロナ後の対面講義要請で前期（4月から8月初旬）に移行し、食品栄養科学部3年生のみを対象に、夏休み休暇を視野においての調査・探究の活動の成果をPPTにまとめる作業を行うことができた。それは初年度の集中+Web条件下での総合指導法の課題と可能性の上に、通常時間割・講義室・対面での課題と可能性を問い直す作業となった。その具体像を上記2023年度後期の3チームによる三種のPPTスライドの構成（目次）を辿りながら示したい。

2. 受講学生 10 名（3 チーム）の作品から

チームりんちゃん「食育と防災」

1. 背景と目的
 - 1) 食育と防災に至った経緯
 - 2) 特別講義
 - ・ 栄養教諭
 - ・ 一級建築士
2. 調査
 - 1) 都市別の防災のあり方の違い
 - 2) 令和 6 年能登半島地震
 - 3) 防災における備蓄の現状と理想
3. 授業計画 指導案の提示
4. 栄養教育の理想を求めて
 - 1) 栄養教諭の必要性について
 - 2) 栄養教諭にできること
 - 3) 栄養教諭の今後の課題

チームまいまい「AI と人間の在り方」

1. 背景(私たちの総合への考え方とテーマ決定へのキーワード)
2. 特別講義：専門家のお話（高校理科教諭と AI 専門家の講義）
3. 方向性決定（2つの特別講義を元に私たちのテーマを決定）
4. 私たちの AI に対する考え方
(グループメンバー4人はAIをどう考えているか)
5. アンケート
(高校生を対象に AI に対する実態を、アンケートを用いて調査)
6. 調査結果の考察
(調査結果から授業構成決定に至るまで)
7. 総合的な探究の時間
(自己分析(自分の目的、やりたいこと、好きなこと)をする授業)
8. まとめ(半年間の活動を通して)

チームコーヒー

「男女ともに幸せに生きるために」
～身近になった社会の問題や
取り組みについて考える～

1. なぜ今ジェンダーを考えるのか
2. 探究までの活動について
 - 1) 探究までの過程
 - 2) 特別講義を聞いて
 - ・ 佐藤さやかさん・佐野優子さん
3. 探究活動
 - 1) 探求活動 1 Google フォームでのアンケート結果について
 - 2) アンケート結果
 - 3) アンケート結果をもとにした探求
 - ・ 生きづらさについて
 - ・ 家事、出産、育児について
 - 4) 探究活動 2 より深い考察へ
 - ・ 女性の進学について
 - ・ 女性の結婚について
 - ・ 服装や化粧について
4. 私たちの考えるジェンダーの未来
5. 授業モデルの提示
6. 授業を振り返って

3 チーム相互の比較により構成と内容の特性を理解するために、目次を縮小して左右上下に並置してみた。

“りんちゃん”は管理栄養士の資格を取得可能な栄養生命科学科の4名。地元の静岡（東海、南海トラフ）が二人、神戸（阪神淡路、南海トラフ）と東京（東北、大都市直下）から一人ずつ。学びの選択と生まれ育った地の二つが食育と防災を結ぶテーマ設定の原点と理解する。それは「都市別防災比較」「能登半島地震」「防災、備蓄、現状と理想」という調査項目に具現化される。特に「現状と理想」との尺度から食の先端科学に防災食の未来を問う試みは、探究活動のモデルと評価する。さらに授業計画の章に続いて「栄養教諭の理想」の章を設け、「必要性」「できること」「今後の課題」を明記する勇気に敬意を表したい。

“まいまい”の4人は食品生命科学科。生成 AI は日々の実験で活用する道具。それ故、メンバー個々が「どう考えているか」を問い直すことでテーマ設定が可能に。実態を知る調査対象に高校生の AI 理解を上げる知的謙虚さと結果の考察に生成 AI を使いこなす大胆さを併せ持つ。授業モデル提示においてもメンバー個々の好みへの配慮と AI との共存の方途を問い続ける意欲を高く評価する。


“コーヒー”の2人は環境生命科学科だが、先の2チームと異なり、女性であることで制約される理不尽さへの異議申し立てを文字にすることから生まれたテーマ。「なぜ今ジェンダーを考えるのか」との章から始まる理由である。しかし同時に、分子や遺伝子レベルでの先端科学の領域に掉さず専門分野であることの鋭さは、Google フォームを使いこなす実証科学の方法と女性の「進学」「結婚」「服装や化粧」という当事者性にこだわるリアリティー重視の判断軸から、「私たちの考えるジェンダーの未来」と題し、それぞれの生活実感に根差した言葉によってガラスの天井を切り裂く二人のセンスの細やかさと表現力の豊かさに称賛の拍手を送りたい。

“りんちゃん”には「栄養教諭の理想を明記する“勇気”に敬意」、「まいまい」には「AIとの共存の方途を問い続ける“意欲を高く評価」」、「コーヒー」には「ガラスの天井を切り裂く二人の“センスの細やかさ”と“表現力の豊かさ”に“称賛の拍手”との文節・言葉の選択で紹介文を結ぶことに注目してほしい。いずれも“知”よりも“情”と“意”の領域に属する言葉。これが総合的の課題と可能性を見出すための“装置”のキーワードとみなすからである。

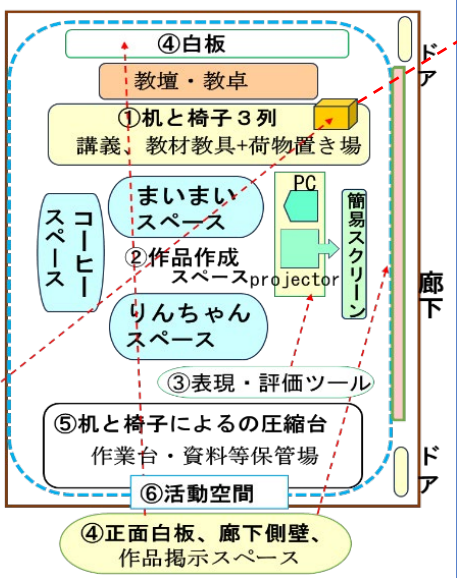
3. 教室（空間軸）と時間割（時間軸）の結び目を解きほぐすことから

初年度の“集中Web”、2年目の“通常時間割・対面講義”での受講学生との活動から学んだ課題と可能性の有用性を再検証するために、3年目の講義において4種の検証装置を考案した³⁾。その一つが教室を連続15回のテレビドラマのスタジオに転換することである。

資料1-1 定員130名の教室




資料1-2 教室改編プラン



活動用の思考・表現ツール

- ・LOUKIN ホワイトボード用クリーナー スプレー 500ml×1本
- ・コクヨ ホワイトボード用イレーザー
- ・ゼブラ 紙用マッキー太字／細字8色セット×6組
- ・ゼブラ 紙用マッキー極細8色×9組
- ・アスクル ふせん 75×75mm
- ・アスクル 強粘着ふせん 50mm×50mm 50冊
- ・マルアイ 方眼模造紙 プルタイプ(20枚入り)×3
- ・アスクル 養生テープ 白 幅50mm×25m×3
- ・MDFクリップボードA3ヨコ コーティングあり×4
- ・コクヨ はさみ テピタ×4
- ・ニチバン セロテープ 大巻ハンドカッター ×4

資料1-3 活動用の教材・教具 (思考・表現ツール)



2022年度と同様に、食品栄養科学部で最も広い講義室使用の許可を得て、県立大食品栄養科学部の教職担当の角替弘規教授（以下敬称略）から送られた教室の写真が資料1-1。130名受講可能な可動式の机と椅子によるドラマづくりのスタジオへの転換シナリオのイラストが資料1-2。130人分の椅子と長短机2種で教室全体を下記5種の空間に分ける（創造する）設計図である。

- ① 受講者10名対象の講義と教材教具箱（思考と表現のツール⁴⁾）や荷物置場のスペース
- ② 3 チームそれぞれの探究活動テーマ設定、調査設計・実施・結果分析・作品化スペース
- ③ 作品の表示と相互評価のツールの操作スペース（projector、PC、簡易スクリーンの設置）
- ④ 毎時間作成作品（10月～12月の隔週土曜講義時に活動成果を描いた模造紙）の掲示スペース
- ⑤ 机と椅子による圧縮台（作業台・資料等保管場）

この5種の空間イラストは時間軸転換のシナリオでもある。2022年度講義開始時に、“通常時間割・対面講義”との条件では、講義と活動という二つの時間（機能）を同等に準備することが必要と判断し、隔週土曜日午後2コマ（13：00～14：30、10分休憩、14：40～16：10）を講義日に指定。前半コマを私からの講義、後半コマをグループ単位の活動の時間とした。

だが実際に始めてみると、前半の私の講義が長くなって後半の活動時間が足りなくなり、チーム別の活動テーマに基づく調査、考察、探究の実践を講義日以外に行うことを求めざるを得なくなった。その結果、各チームの活動状況に即しての指導助言の機会を失い、講義の延長での一方的な指導（指示）の言葉を強制する場面が増えてしまった。それでも3グループ（4人×3）12人

の夏休みを超えての頑張りで、非常に質の高い3種の作品を完成させてくれた⁵⁾。

それだけに、講義担当者としての反省から、次年度のために次の改良点をメモにした。

- ①講義時間を後期の隔週土曜日午後に変更し、年末年始の休日をはさむ教育課程に転換する。
- ②午後2コマの総時間(90+10+90=190分)において、講師(私)の講義は原則30分に絞り、休憩をはさむ160分を学生のチーム別活動にあてる。
- ③チーム別活動160分の後半30分をその日の成果のプレゼンと相互評価の時間にする。
- ④チーム活動の作品を順次掲示、3チーム相互のテーマ探究の進化と深化の手がかりとする。

この4種のメモにより、2023年度の講義室を5種の空間と活動中心の時間構造に転換する時空創造のイラスト描写に挑んだ。その模索過程で総合指導法の新たな課題と可能性に気づかされた。

①講義➡②作品作成➡③表現・評価ツール操作➡④作品掲示という4種の機能を付与した空間と時間はドラマをつくるスタジオに似ていること。とすれば、ディレクター、シナリオライター、プロデューサー、そしてAD、映像・音声・大道具などの役割が必要になる。その前に、ドラマの主催者(オーナー兼プロデューサー)は講師の私なのか、それとも各チームのリーダーなのか。後者とするとの判断を明確に形で示すために、教壇・教卓に接する位置においた机と椅子で3列残した教材教具(思考と表現のツール)と荷物の置き場の端に、私の①講義スペースを配置した。

とすれば、3チームのスペースはどこまで広がるか。チーム名で囲む②「作品作成スペース」までか。各チームが発表時に操作する機器やスクリーンが配置される③「表現・評価スペース」も含むか。掲示スペースになる④「白板と廊下側壁」はどうか。⑤「机と椅子の圧縮空間」は、作品作成作業台や各種大小機器・道具、参考資料・書籍の保管場所など、臨機応変に活用する予備スペースになる。このように機能を付与すると、①「教材教具と荷物の置き場」も含めて、130名定員の教室全体を点線で囲む⑥「活動空間」が、3チームに配置された空間に転換する。

ドラマ作りの役割は各チーム(4名、4名、2名)のメンバーが、それぞれ作業の進行状況に応じて役割交換を自在に行うことで処理可能。その手配をプロデューサー役のチームリーダーが担うと想定する。とすれば、講師の私と教科書の役割(機能)はどうか⁶⁾。

空間軸(教室)と時間軸(時間割)の転換(結び目を解く)は、教師と教科書の役割(結び目かたち)の転換を求めることになる。

4. 教師(教える人)と教科書(教える内容)の結び目を解くために装置(その1)

2021年度3学部合同集中Web講義では、角替弘規の紹介で講義助手の役割をお願いした大学院生青嶋沙奈さんを中心に、LINE上に受講学生全員が参加するサイトが開設された。その結果、講義と活動のための情報を青嶋さんから瞬時に文字情報で受講学生全員に伝えることができた。

青嶋さんのサポートは2021年度のみであったが、LINE上のサイトは2022年度対面講義でも有用と判断し、私を中心に開設することを試みた。だが、残念ながら短文の連鎖での情報交換に不慣れな私では、学生が求める円滑な情報交換のツールとして使いこなすことができなかった。

それでも3チームそれぞれの活動状況との関連で、LINE上での情報交換を見ることができた。書き込まれる一文の文字数は少なくとも、文脈を共有する目線から生じる意味空間を重ねることで、“情”と“意”の衣で装う“知”の豊さを読み取ることができた。だが講義時という文脈ではない文字会話のため、学生の間で進行する情報交換の流れに入るタイミングを見出せなかった。

この点での反省をふまえて、分からないことは受講生に相談するとの原則に転換し、2023年度の講義開始日(10月7日土)を迎えた。受講者は10名。約30分、講義と活動の原則を説明したあと、活動開始の意味を込めて、受講生にこの場を共有する人たち全てを対象に自己アピールを

お願いした。その過程でチーム分けの基準を話題にしたが、人数差はあっても専攻単位（栄養生命科学科 4 名、食品栄養科学科 4 名、環境生命科学科 2 名）との全員共通の要望に従った。

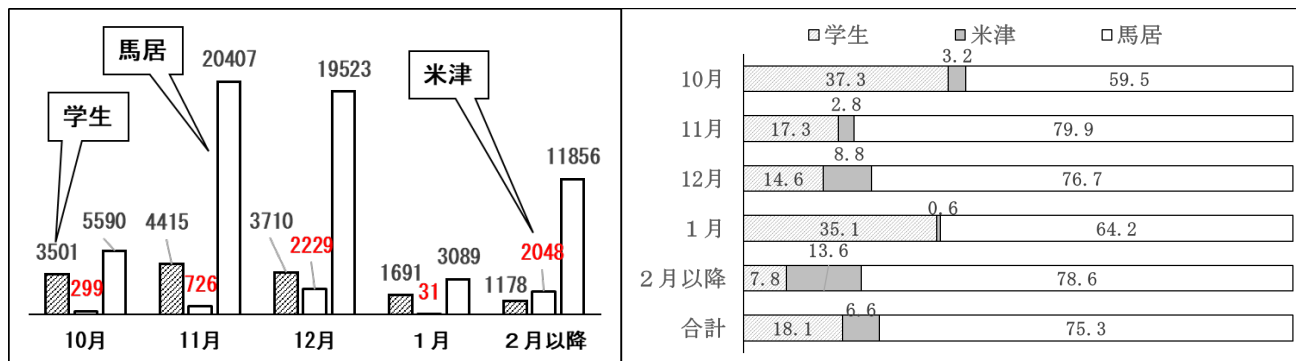
さらに、自己アピールの中で知った PC・projector 操作とイラストを描く力量の高さを理由に、A. I さんに講義全体のリーダーをお願いしたところ、3 チームのリーダー候補 3 人 (N. O さん、K. T さん、M. K さん) も自己申告に近い雰囲気でも明確になり、4 人同時に全員の同意を得た。

その勢いで、教室改編プランに基づく机・椅子の移動による活動空間づくりと全体リーダー A. I さんによる機器設定が同時に進行し、予定より早くチーム別スペースでの活動が可能になった。この時間を活用して LINE 設置の方法について各グループでの検討をお願いしたところ、瞬時に A. I さんが「私が準備します」と言ってくれた。それならば、と 3 チームのリーダーも加わり設定様式が即座に決まり、「総合的な学習」と名付けた LINE 上のサイトに 3 チームのメンバーから参加メールが次々と送られた。戸惑っているのは講師の馬居と活動のサポート役として参加をお願いした富士宮市立黒田小学校の米津英郎校長（以下敬称略）の 2 人だけ。その状況に気づいた A. I さんの助けで最後尾に登録された。この間に要した時間は 10 分であった。

なぜここまで詳細に記述するのか。この 10 分間で 2023 年度の講義と活動の軌道が定まったと評価するからである。LINE 設定様式をリーダー 4 名で決定し、チームメンバー全員が同意の証として瞬時に登録する。私と米津英郎は最後尾に招待される。教室転換の合間に行った LINE 上の「総合的な学習」開設は、総合指導法における活動の主事者（オーナー兼プロデューサー兼ディレクター）が講師からリーダー 4 人に転換する装置（スタジオ・舞台）の設置作業であった。

その証左（エビデンス）が資料 2 と資料 3。LINE「総合的な学習」に、3 チーム 10 名と米津英郎と馬居が書いた月別文字数（トーク履歴）とその三者間（学生、米津、馬居）の比率である。

資料 2. 月別 LINE 記入文字数(学生・米津・馬居) 資料 3. 月別 LINE 記入文字数比(学生・米津・馬居)



講義開始 10 月の文字数内訳は学生 3501 (37.3%)、米津 299 (2.8%)、馬居 5590 (59.5%)。11 月は学生 4415 文字と増えるが比率は 17.3% と減少。米津も 726 文字と倍増強だが比率 2.8% に減。その原因は馬居の文字数が 20407 と大きく増加したことだが、12 月はどうか。学生 3710、馬居 19523 とともに減だが 10 月よりも多い。米津英郎は 2229 と 10 月の 7.5 倍と大増加である。

この三ヵ月の変化を文字数で見れば、主導権は馬居にあるように見える。だが 3 カ月合わせて 45520 文字を書き込む作業の発信源は、3 チームによる隔週 6 回 (12 コマ) の講義日の活動 (160 分)。模造紙に描き上げた 6 種の商品 (イラスト表現) の凄さと LINE 活用の説明文の明証さへの感動によって誘引された未知の景色への飛翔の期待が、馬居と米津に書き続けさせた結果にすぎない。主導権は「総合的な学習」という舞台を創設した 4 人のリーダーと賛同参加したチームの皆さんにある、との評価をアドバイザーの米津英郎と強く共有する。

大学院生の青嶋さんのサポートで気づいた LINE の機能。それを活かすことができなかった 2022 年度 3 チームの皆さんへのお詫びの意を込めて、2023 年度 3 チームの皆さんにお願いして設置し

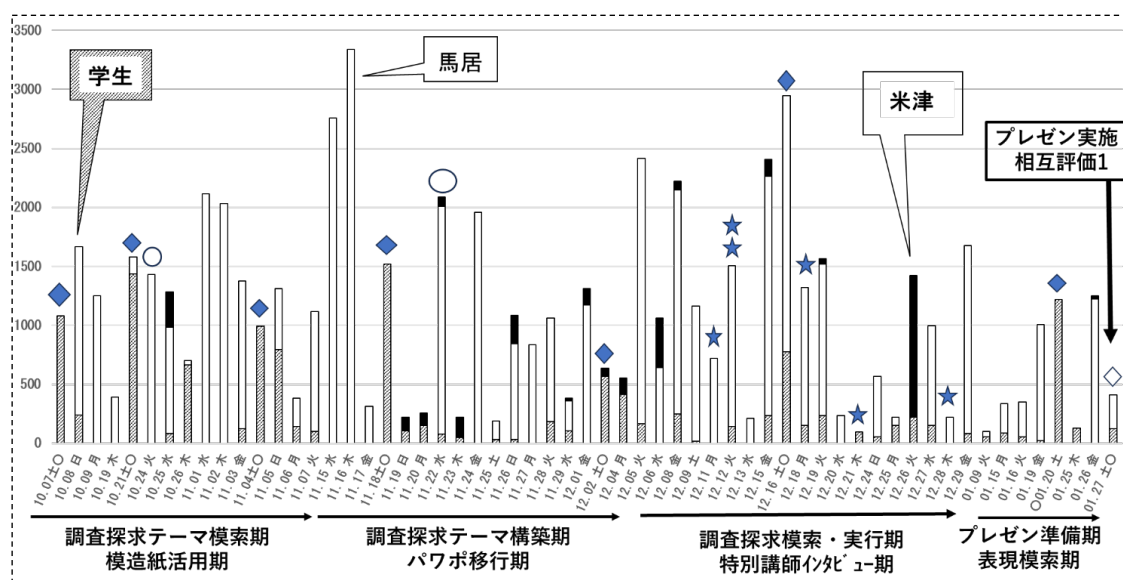
た LINE「総合的な学習」。これが教師と教科書の結び目を解くための“装置 1”である。

装置 2 は何か。講師の複数化である。現職校長の米津英郎に、公務と家庭の事情に支障がない限り、との条件で授業づくりのアドバイザーをお願いした理由である。ところが一度も休むことなく、サイトでの発言文字数も増え続け、「学生さんの活動意欲が素晴らしくて休めません。次回が楽しみです」との言葉を講義が終わるたびに聞かされた。このこともまた、講義と活動（総合指導法）の主導権が講師の私ではなく 3 チームの皆さんの側にあることの証左といえよう。

もう一人サポートをお願いした。県大の角替弘規である。教室と講義時間の設定、教材教具、PC、projector、screen など活動ツールの準備と保管、配布資料印刷、学生の質問など、非常勤では対処困難な課題を全て解決いただいた。講義日は米津英郎、講義日外では角替弘規のサポートにより、3 チームの卓越性を引き出すことができた。この複数講師の活動状況（機能）の実際（具体性）を LINE に残る日別文字数の推移（資料 4）を解き口に、次節にて開示しよう。

5. 教師（教える人）と教科書（教える内容）の結び目を解くために装置（その 2）

資料 4. 記入日別 LINE「総合的な学習」記入文字数(学生・米津・馬居)と調査探究進行期表示



資料 4 に図示した講義開始日 10 月 7 日から最終日 1 月 27 日までの LINE「総合的な学習」に記入された学生（斜線）、馬居（白）、米津（黒）の文字数（積みあげ棒グラフ）の推移から、4 月～12 月の◆隔週土曜講義日の傾向を見ると、10.07、11.04、11.18 の記述者は学生（斜線）のみ。10.21 と 12.02 も大多数学生（斜線）。12.16 のみ馬居（白）が多いが、トーク履歴に戻って記入時間と確認すると午前 0:15～1:16、記述内容は午後の講義と活動のための参考資料等 43 点送付 URL が並ぶ。16 日午後の活動過程での記入は学生（斜線）のみである。いずれも 10～12 月の講義日 6 回（12/15 コマ）が 3 チームの活動中心であることを証す数値である⁷⁾。

さらに講義日改め活動日の翌日からの週も学生の記述（斜線）を確認。隔週土曜日午後の活動を引き継ぐチーム間の情報交換（問いと返答と意見）の活発さを評価し、交錯する情報から読み取る課題に対応する馬居（白）の記述が積みあがる（事後補講）。チーム別の模造紙に描かれたイラストと文字の組み合わせの創発性に感動する馬居（白）の評価の高さを示唆する文字数である。さらにより高い文字数の山（白）が二週目に並ぶ。週末土曜午後の次回活動 160 分で、各チームの作品に潜在する異なる可能性を開花させるため、三者三様の資料送付 URL と 30 分制限の講義を補う多彩な文字情報（事前講義）を活動日前日まで行う LINEE 記入（馬居白）が原因。

具体例で示そう。資料4の下位に並ぶ調査探究過程4段階と○★が付く日の関係に注目を。○10.24は調査探究テーマ模索期の間。第1回活動日◆10.07は、一人ひとりの自己紹介メモと小中高総合体験記(主体的)を手掛かりにチーム名と調査探求テーマを結ぶコンセプト模索過程(対話的)を模造紙に描く。第2回活動日◆10.21は、総合的な“学習(小中)”と“探求(高校)”の相違を問い直す活動に挑む(探究的)。その作業で生まれた“りんちゃん”(左)と“まいまい”(右)の作品(発表時撮影)と2日後○10.24にLINE記入した馬居の評価=私見を対置する⁸⁾。



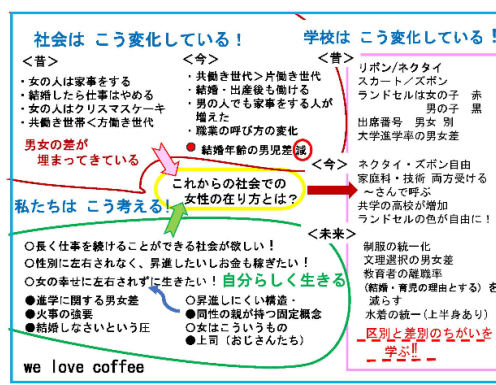
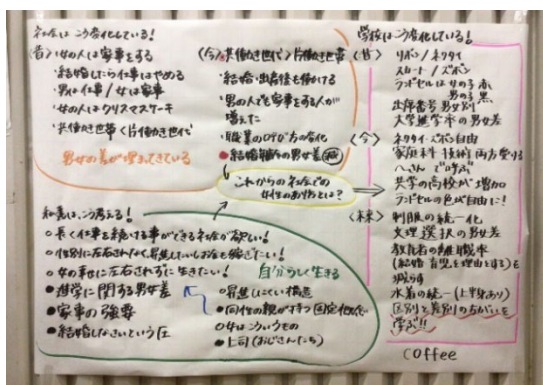
“チームりんちゃん(猫)”のみなさんへ

- ・活動の場(時空の多様・多元・可変)と学びの経緯(方法と内容の多様・多元・可変)、この三種(多様・多元・可変)の相違の多重性に起因する混沌としか表現できない記憶と経験の世界の読み取り(整序化)に真っ正面から挑み、現職教員の研修資料にも活用可能な小中の「学習」から高校の「探求」への推移の多様性、多元性、可変性を精彩かつわかりやすく表現したモデル図の作成。
- ・学校のリアルに根差した学習方法の特性を取り出して、学びの個性と共有性の尺度を用いて、12年間の学びの時空に描かれる自己形成の軌跡の軸と獲得・蓄積される学習の方法と内容を立体的に把握・具象化(学びの時空の秩序化)する発想力、理解力、表現力の卓越さに感動です。

“チームまいまい”のみなさんへ

- ・海の深さと海洋生物の特性に化す比喻を駆使することで、多種多様な活動の重なり(混在する記憶と経験)に隠された価値ある「学習」の成果(学習内容の具象化・細分化・再分類)に名前を与える(個別化・類型化)ことによって、より高度かつ有用な学びの成果を志向する「探求」へと進むモデル図の作成。
- ・経験された活動に潜在する学びの豊かな可能性を引き出す視点の鋭さと表現力の豊かさ。
- ・個々の経験に意味と名前を与えることで居場所を与え、各経験固有の特性の有意性(存在の価値)を認めあうことにより、異質性を貫く融和と背反の混在に根差す困惑の交錯が育む意外性(違和感)を、おおらかに楽しむ(遊ぶ)契機に転換する想像力と創造力に感動です。

次の○11.24は調査探究テーマ構築期に入り、表現媒体が模造紙からパワポに変わる段階の作品。ここでは“coffee”の模造紙に描いた文字情報(調査探究対象)のみの作品と馬居がパワポに転記した作品を並置し、その意図と“coffee”独自の魅力を評価した私見を下位に置く⁹⁾。



チーム“coffee”のみなさんへ

“まいまい”と異なり“coffee”は文字表現のみで、思考の方向も明確、考察の選択肢の並びも私の得意な

領域でしたので、楽勝と思って作業を開始したのですが・・・。

一行ごと転記する過程で、私の想定を超える多種多様かつ多元的な問いの綴りが並んでいることがわかり、その一つ一つの意味を問いつつながら、文字の位置を確定する微細な操作に挑まざるを得ませんでした。さらに、配分された綴りの分別を、直線ではなく曲線（PPTでは最も苦手な操作技術）で囲む作業にも挑むことになりました。結局、複雑なイラスト形成操作で悩んだ“まいまい”とは異なり、一番単純な文字（大きさ、長さ、字間）と線（変幻自在な曲線による意味の領域化）の操作で、試行錯誤を繰り返し、最も長時間を費やしました。私自身の思考との重なりがなければ・・・です。どこまで進むか。期待しています。

活動の文脈は共有するが、テーマ、表現方法が全く異なる“りんちゃん”と“まいまい”のイラストと文字による作品（模造紙）。文脈と表現方法ともに異なる文字のみの“coffee”の作品（模造紙）。模造紙上の“coffee”の文字の並びに物語を見出す馬居の模写（PPT）。評価を私見として各作品の解説に挑む馬居の文字表現3種（LINE）。いずれも上述した総合指導法のために、①転換を試みた教室、時間割、教師、教科書による活動から創出された3チームの作品、②作品に潜在する可能性を拓く馬居による言葉の選択・綴りの具体例として提示した。①②ともにモデルなき表現である以上、馬居の私見の適否と可否、当否と是非については読者に委ねざるを得ない。

ここでは未整理のままの「講師の複数化と教科書の再定義」について加筆しておきたい。

まず資料4の調査探究模索・実行期の★の日に講義をお願いした特別講師6人を紹介する。

- ① 12月11日 06:30 PM 静岡県内公立小学校 栄養教諭（栄養教育の現状と課題）
- ② 12月12日 06:30 PM 静岡県内公立高等学校 理科教諭（高校理科と総合的探究の実践）
- ③ 12月18日 06:30 PM 1級建築士 高田好浩（防災食と避難施設での食の在り方の問題）
- ④ 12月18日 01:00 PM 動物園飼育士 佐藤風（理系女性の就労、ジェンダーバイアス）
- ⑤ 12月21日 08:30 PM 東京大学大学院学際情報学専攻 李在原（AIの理解と生存戦略）
- ⑥ 12月28日 01:00 PM 企業広報責任者 佐野優子（企業社会のジェンダーバイアス）

★ “りんちゃん”は①と③、“まいまい”は②と⑤、“coffee”は④と⑥を講師に

第5回活動日12.02において調査探究テーマが明確になった時点で、模索・実行期として最先端の専門家に実践化の方途を学ぶ機会をグループ長会に提案⁸⁾。各チームの希望を得て、馬居と米津のネットワークから最適の友人を選び、zoomでの講義をお願いした。講義内容はチームの作品（写真・PPT）とLINEトーク履歴を転記したWordのPDF版を講師に送付し判断を願った。

講義はチーム単位（他チーム参加自由）に原則2時間。zoomを介してだが、少人数対面ゼミの雰囲気近く、最先端の知識と講師の私的な判断や思い、悩みや夢、理想と現実が交錯し、新たな“知”と“情”と“意”が一体として生成される現場を垣間見る貴重な機会になった。

講義後、チームリーダーの責任で講義概要のメモを作成し、メンバー個々の感想とともにLINE添付し、3チーム共有の情報になる条件を整えた。より詳細には、本章〇〇頁の「2.受講学生10名（3チーム）の作品から」で紹介した目次に示すように、調査探究のテーマ、方法、内容の設定の背景として、特別講師に学んだ最先端の知の活用過程が、3チームそれぞれ独自の理解と解釈とともに、公開版課題研究報告書に明記される。参照いただきたい⁹⁾。

このように、馬居が担当した2023年度の総合指導法の講師は、特別講師6人を含めて9人である。もちろん公的ではなく馬居と米津の私的な人間関係の延長でお願いしたにすぎないが、3チームの皆さんにとっては、調査探究の過程において最も価値ある情報を得た講師は、馬居ではなく6人の特別講師と理解する。学習指導案作成では現職校長の米津であったことも付記する。

なぜ総合指導法に講師の複数化が必要か。実はその答えは、小中高の学習指導要領の「総合的な学習の時間」と「総合的な探究の時間」に明記される。その記述を検定教科書の機能の整合性との対比により、総合指導法の課題と可能性の提起に結ぶ視座から次節にて述べよう。

6. 現代的課題への問いは社会事象の多様化、多元化、可変化への注視から

「(5) 目標を実現するにふさわしい探究課題については……例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題……などを踏まえて設定すること。」

上記引用は小学校学習指導要領第5章、中学と高校の学習指導要領第4章の「総合的な学習の時間」(小中)と「総合的な探究の時間」(高)から「第2 各学校において定める目標及び内容」の「3 各学校において定める目標及び内容の取扱い」の「(5)」から取り出した小中高共通文章。

煩雑な引用カ所の紹介になったが、法に順ずるとみなされ官報に告示される学習指導要領の日本の公教育における重みを示唆する表現と理解いただきたい。その位置づけから下線部(馬居)を付記した文を読めば、小中高の総合的な学習・探究の課題の壮大さを確認できよう。

しかし同時に、「国際理解、情報、環境、福祉・健康など」を課題とする授業を担う資質・能力を持つ教師がどれほどいるか。同じ条件で教職専門の総合指導法の単位認定に責任をもつ資質・能力を持つ大学教員の割合を省みてほしい。実はその作業を自己に強いた結果の報告が本章と位置付けたいが、いまだ途上といわざるを得ない。その理由は、「現代的な諸課題」と総称される領域は「多様性」「多元性」「可変性」という現代社会の三種の特性が“同時進行”する社会事象によって構成されているからである。とはいっても特別なことではない。「国際理解」「情報」「環境」「福祉」「健康」という単語が指し示す領域と事象の特性を“多様性”と表現することに異論はないであろう。さらに、その“多様性”は、法制度や所属集団の相違(利害の対立)、財と門地や性差と文化の差異(差別と格差)など、“過去”から積みあげられた価値と利害の“多元性”と表裏の関係にあることも理解されよう。そしていずれの課題も同時多発的な“変化流動性”(進化と淘汰の輪廻)の社会的文脈(未来からの要請)から逃れえないことも経験されよう。

実はもう一つ大事な課題が上記引用でカットした二カ所に記載される。特に「学習」から「探究」に変わる高校では、「探究課題については」に続き「地域や学校の実態、生徒の特性等に応じて」とある。「横断的・総合的な課題」では「地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題などを踏まえて設定すること」と続く。

「現代的な諸課題」は非常に壮大で多岐にわたるが、「地域や学校の実態」→「生徒の特性」→「地域や学校の特色」→「生徒の興味・関心」と“地域”“学校”“実態”“特性”と対象を二段階に焦点づけた後に「職業や自己の進路」(高校のみ)という一人ひとりの未来の姿に集約する。喫緊の現代的諸課題(多様性)に対峙するが、その探求は学習者の生活する地域と学校の実態・特性(多元性)への注目を介し、学習者一人ひとりの進路=未来(可変性)の選択に結ぶ。世界の現実には迫る大志と一人ひとりの人生にこだわる優しさを等価に置く理想を読み取りたくなる記述である。

とすれば、探究課題の多様性、多元性、可変性と同時に学習者個々へのかかわり方が課題になる。そのための方法として、生活科誕生期に全国の小学校の先生方の実践から学んだ4種の“みる”(見、観、診、看)を紹介したい。総合指導法と総合的な学習・探究の担当教師の文脈から例示しよう¹⁰⁾。

ア) 児童・生徒・学生の今(あるがまま)を可能な限り予断を排して“見る”

イ) 教師自身の偏差の自覚と学習者一人ひとりの課題の具体性に寄り添って“観る”

ウ) 課題(問題)解決への処方箋を書くための処方を求めて“診る”

エ) 処方箋に基づく処置の経過を“看る”ことで、処方箋の適否を判断する(評価の目的)

この4種の文脈から“LINE 総合的な学習”を教師と教科書の転換装置1とする理由を理解されよう。さらに、総合的な学習・探究の課題である現代的課題の多様性(適材適所)、多元性(臨機応変)、可

変性（融通無碍）に対処するには講師の多数化が最も合理的な方法であることも理解いただけよう。しかし、本章で例示した LINE サイト設置や講師の複数化を全国の小中学校での実践化は困難なことも自明の理とされよう。ならば小学校では学級担任一人で、中高では教科担任一人で授業を行うことがなぜ可能なのか。学習指導要領によって教科書と授業時数のありかたが全国共通（平等）に準備されているからとの答えにも多くの先生方は同意いただけるのでは。

周知のように、小中学校の教育は「各教科」「特別の教科 道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」によって構成される。その中心は、私見だが、小学校 10 種、中学校 9 種の教科である。その理由は「各教科」には、名称が直截に示すように、全て学習指導要領に基づく検定教科書が広域採択システムにより無償で配布される。時間割を作成するために必要な年間の総授業時数も教科・学年・学校種別に配分（強制）される。そのため、大学の教職課程における教職専門科目としての各教科の教育法は、検定教科書を主たる教材として、教科・学年・学校種別に異なる授業時数に対応する授業づくりの方法を組み込んだ教育課程を求められる。例外は「特別の教科としての道徳」といえよう。「特別の」と付記されるように、各教科に分類される検定教科書とは位置づけが異なる。

道徳の教科化に貢献された古い友人の押谷良夫武庫川女子大教授との対話から、子ども一人ひとりの思いによりそうことが第一条件、ということを学んだ。道徳の教科書は教える書ではなく、「問いを創る思考の道筋を示唆するモデルの書」と私なりに理解するが、教育勅語批判を背景に戦後の道徳教育で問い直された徳目主義を今なお重視する観点から活用される授業もあるのでは、との危惧を抱く。この二つの道徳観は教職専門の講義においても課題になると思うが、道徳が担ってきた伝統的な役割から教員養成における道徳教育法の教育課程や教授方法には他の教科以上に蓄積があると評価する。

「特別活動」には検定教科書はなく、配分された授業時数も各教科と比較して少ない。他方で、毎朝の学級会、全校生徒の朝礼、運動会、音楽会、入学式など、実施形態の固定化と共有化が進む。教科書に類似のサブテキストや資料集等（含む映像教材）を用いての学習が可能と判断する。

いずれも 35 年間の静岡大学教育学部での教員養成の経験に基づく私見だが、各教科、道徳、特別活動では、それぞれの特性に応じた教職専門科目としての標準化されたテキストの作成は、それほど難しくはない。このことは小学校教員免許取得のための教職科目の単位取得という視点から見れば、受講対象となる全ての教科と学年の教科専門と教職専門において、体系化された知識と標準化された授業の方法の記述と点数による一元的評価が可能なテキストの理解（記憶、操作、表現）が求められる。

他方、中高教員免許 1 教科取得の場合は、教科専門科目は専攻する専門科目取得単位と重なる。教職専門を構成する各科目は相互の関係性への配慮なく隙間（専門科目優先）の時間に配置（複数学年に分散）され、講義担当は非常勤、という大学や学部も少なくないのではと拝察する。

例外がある。それが「総合的な学習の時間」と「総合的な探究の時間」。授業時数では、中学校の配分表を見ると、「総合的な学習の時間」は第 1 学年 50 時間、第 2 学年と第 3 学年は共に 70 時間を配分。この時数は、教科との比較では、音楽（45-35-35）、美術（45-35-35）、技術・家庭（70-70-35）より多く、道徳（35-35-35）と特別活動（35-35-35）のほぼ 2 倍。他方、授業時間の内容についての明確さを比較するために公開された中学校学習指導要領（平成 29 年告示）の記述頁数を見ると、音楽 8 頁、美術 8 頁、技術・家庭 12 頁、道徳 5 頁、特別活動 6 頁に対し、「総合的な学習の時間」はわずか 3 頁。教室に掲示される週間単位の時間割に記載される授業時数は、音楽、美術、技術・家庭、道徳、特別活動より多いが、教科書がないどころか、授業内容を記述するスペース自体が最も少ない。

しかし、実はこのような時間と内容のアンバランスこそ、非常勤講師として担当した県立大の受講生の皆さんから感じた「専門課程の学生の表現の力量の高さとセンスの良さ」（35 年苦楽を共にした馬居の研究室の学生よりも？）との仮説の淵源であろう。総合的な学習と探求に関する学習指導要領

の記述には、全国共通のサブテキストや資料集を用いての授業のありかたを超える（実質否定？）学びと活動を要望する文章が並ぶ。そのことを象徴するのが、他の教科等では「内容」と記す項目の位置に、本節冒頭に紹介した「各学校において定める目標及び内容」という見出しの項目が置かれていること。総合的な学習の時間の目標は、他の教科等のように学習指導要領の項目名「内容」に記述され文章の写しではなく、「**各学校における教育目標を踏まえ、総合的な探究の時間を通して育成を目指す資質・能力を示すこと**」¹⁾と各学校に委ねられる。さらに、その内容も上記にて考察したように、i 現代的な諸課題（横断的・総合的）、ii 地域や学校の特色、iii 生徒の興味・関心、iv 職業や自己の将来となる、と簡潔明瞭にキーワード化可能かつ多様・多元・可変をゆるやかに組み込む概念に要約できる。換言すれば、「子ども一人ひとりが、その生きる場に生じる問題に気づき、自分自身の今と未来への問いと重ねながら、解決への道筋を友とともに探し続ける活動」となる。そしてこのワーディングが、静岡県立大学食品栄養科学部3学年 10人の皆さんとの活動の前提にあることはご理解いただければ。しかし、同時に、私の静岡大学での35年間に、共に学んでくれた学生のみなさんにとって、最も困難な課題と私が判断する理由もご理解いただけることを願う。

あくまで私見だが、学習指導要領は検定と授業時数配分の制度によって、ナショナルカリキュラムの実践化を日本の公教育システムの中核に維持することを可能にした、と評価する。しかし、総合的な学習と探究での記載内容は、その中核システムである検定教科書システムの外に位置付けざるを得ない。「横断的総合的」という記述に従えば、外側の領域は大幅に他の教科等に配分された時間に広がることも許容される。敗戦後に誕生した学習指導要領は、7度の改訂をへて構築した教育システムを組み替える（改編から改変への）契機を組み込んだ、と私的には評価したい。その意味で、教室と時間割の転換、教員の複数化、教科書にかわるLINEサイト設定、という本章での展開に他教科等を導く方向に舵をとるか。逆に他の教科等の維持を優先する教育システムへの同化を強いるか。前者への可能性を求めて、「1人1台PCタブレット」の現状と可能性を問う新たな章を書き起こすことを約して末尾の言葉とする。

注 記

- 1) 「教職課程認定基準等について」2018.12.20 平成30年度教職課程認定等に関する事務担当者説明会 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課 資料2 P.11～12
- 2) 小学校学習指導要領第5章、中学と高校の学習指導要領第4章の「総合的な学習の時間」（小中）と「総合的な探求の時間」（高）の「第2 各学校において定める目標及び内容」の「3 各学校において定める目標及び内容の取扱い」の「(5)」参照、詳細は本章P〇〇参照 本稿9頁
- 3) 教師、教科書、教室、時間割の転換（縛る結び目を解く）
- 4) 活動を誘引する小道具・大道具作成の器具と素材（活動のストーリーを想起させるツール）
- 5) 「2022年度静岡県立大学「総合的な学習・探求の時間」教育・指導法」参照
<https://www.uer-labo.jp/room/gakkou/gakkou03/2022/05/14/3987>
◎チーム「こしょく」にならないために Mスライド95枚
◎チームお化け屋敷「高校生の食事」スライド51枚
◎チームめんだこ「学校給食と食育-学校給食の形態と栄養教諭の有無による食育のちがいについて-」スライド80枚
- 6) シラバスには下記2書をテキストとして明記
 - ①『人口減少時代の家族・学校・地域・社会～生涯にわたる学びと教えの 新たな可能性を求めて～』馬居・角替共編著 NSK出版
 - ②小中高学習指導要領「総合的な学習(小中)・探求(高)の時間」解説 文部科学省※LINE「総合的な学習」に添付したサブテキスト（拙稿）、調査報告、資料・データ等は「2021年度静岡県立大学集中講義「総合的な学習・探求の時間」教育・指導法のために」にストック

<https://www.uer-labo.jp/room/2021/12/18/2425> 参照を

7) LINE「総合的な学習」に受講学生 10 名と米津英郎と馬居の記入歴
Word 転記版の PDF を下記サイトにストック 参照ください。

2023 年度静岡県立大学「総合的な学習・探求の時間」教育・指導法

<https://www.uer-labo.jp/room/gakkou/gakkou03/2023/12/10/4747>

8) 上掲

9) 上掲

10) 全体リーダー、3 チームのリーダー 3 人、米津英郎、馬居、計 6 人による zoom 会議
活動の進め方、特別講義の人選と日程調整、報告書の作成スケジュールなどの検討が目的

11) 上掲